



TITLE:

資料紹介:昭和55年度外国図書(大型
コレクション) ペルシア語イラン語
文献資料集成

AUTHOR(S):

CITATION:

資料紹介:昭和55年度外国図書(大型コレクション) ペルシア語イラン語
文献資料集成. 静脩 1981, 18(1): 5-6

ISSUE DATE:

1981-05

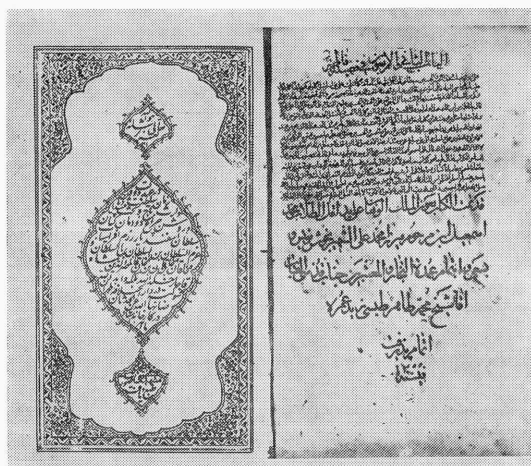
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36890>

RIGHT:

昭和55年度外国図書（大型コレクション）

「ペルシア語イラン文献資料集成」



1

本学は、昭和55年度「外国図書（大型コレクション）」購入費の配分を文部省から受け、「ペルシア語イラン文献資料集成」を購入することができた。

この資料は、1,129部、1,575冊に及ぶ大部のもので、大部分はペルシア語で書かれているが、アラビア語のものも少し含まれている。内容的には文学・言語学：405点、歴史：262点、哲学・神学：134点をはじめ、参考図書、地理・旅行記、美術・考古学、自然科学等、多分野にまたがっている。なかでも、重要な資料として、16～18世紀の特殊文献も含んでおり、これらは二度と入手できないもので、チムール朝、サファヴィー朝期の研究に大変有益なものである。

大部分はイラン（主としてテヘラン）で刊行された活字本であるが、若干の石版刷りも含まれている。イランの他に、アフガニスタン（カブール）、パキスタン（カラチ、ラホール）、インド（カルカッタ、ハイデラバード、ボンベイ等）、トルコ（アンカラ、イスタンブール）、ソ連（モスクワ、バクー）等で刊行されたペルシア語書籍等も見出される。このコレクションの特徴を一口

で表現するなら、(1)時代的には古代～現代、と非常に長期間で、(2)地域的には広範囲、の文献であることがいえる。これらは昨今のイスラム革命により、出版状況をはじめさまざまな社会状況が激変したため、今後、入手することはほとんど不可能である。

2

我が国におけるペルシア語文献の収集は、未だ決して多いものではない。現在のところ、最も多く所蔵しているのは東洋文庫であるが、それともアラビア語や現代トルコ語文献に比べ、ペルシア語文献の収集は遅れている。

本学においても、文学部附属羽田記念館が永年の現地調査と科学研究費によって収集されており、研究者に有効に活用されているが、今回のコレクションと併せ、原典に基づく研究活動の巾が広がり、全国的な利用が期待される。

このコレクションの入手を契機として、関係機関との提携により、イスラム学の研究はますます発展していくことだろう。

3

このコレクションは“ひとまとまり”のコレクションとして意義があるため、各図書の内容による分類箇所に分かれて配架するよりも、“ペルシア語文献”として一箇所にまとめた方が利用上からも非常に便利である。従って、附属図書館では「請求記号」を「ペルシア」の1, 2, 3……という一連番号で配架している。

利用者に対しては、全国の研究者の便益に資するよう目録を早く作成することが、このようにまとまったコレクションを入手できた図書館の責務と考え、購入後、ただちに作業に入り4月に脱稿、6月には『京都大学附属図書館所蔵ペルシア語文献目録』として印刷完了した。

目録の作成にあたってはペルシア語であるため、文学部西南アジア史学講座の方々のお世話に

なった。その過程では、我が国に未だペルシア語文献のまとまった目録がないため、今後、他機関で作成される時の一つの標準的なものとなることも想定し、記述項目、正確さ等について参考資料による検証には相当の労力を要した作業であった。その結果、本文：155頁、索引：54頁、計209頁におよぶ目録が完成した。関係者一同、慶びひとしおである。参考のために分類項目と点数を記しておく。

1. 全般・一般参考図書	113点
2. 歴史	262
3. 伝記と物語	59

4. 地理・旅行記	51
5. 美術・考古学	31
6. 文学・言語学	405
7. 哲学・神学	134
8. 社会学	9
9. 純粋科学と実用科学	56
10. 新聞・雑誌	20

西南アジア史学講座の皆さま方に深く感謝する。

(注) このコレクションは、附属図書館に配置している。

明治初年の貸出規則について

「神陵史」によれば、「ここにいたるまでの経緯からいえば、三高と京都帝国大学とは幹を同じくした二本の分校と……」述べられているように舎密局に始まって再三改名されながら第三高等学校となった歴史は、京都大学の歴史であるとも言える。従って京大の図書館史を考える場合、舎密局のそれまで遡る必要があると思われる。

近代的な図書館の源流として、「書籍館」或は「書籍縦覧所」が誕生するのであるが、明治7年12月に大坂英語学校と名を変えて間もない明治9年に、ここでも「書籍縦覧所」が大阪城の西隣りで加藤清正の旧邸があったといわれている屋敷跡の「遠侍」というところに設置されている。「遠侍」というのは、「内侍」（主殿に近い場所に居る侍）に対して、門のそばにあって「門番所」の向かいにつめていた侍・場所のことである。

それよりも少し前の明治8年2月に、大坂英語学校の書籍掛が学校長に対して次のような伺書を提出して決裁を得ている。

教師公私用共書籍拝借之規則不相立右様不取締ニテハ終ニ紛失之憂ヲ引候起哉モ難斗、就而ハ以来別紙之規則相立出納致度、此段相伺候也

明治八年第二月二日

明治2年5月1日に教頭の和蘭第二等官医ク・ウ・ハラタマや御用掛田中芳男及び平田助左衛門等の多大の尽力によって舎密局が発足し、書籍掛

が書籍の購入を続けた結果、この頃には英書4,544冊、仏書1,038冊、蘭書21、和書933冊、合計6,536冊を所蔵していたが、「貸出規則」と言ったものがなかったのが、初めて4カ条からなる「書籍拝借心得」が誕生し、しかもそれが英文を主体として日本文が従となっている点、お雇い外国人が居たにせよ、明治維新後のあわたたしさの中にあつて、なお格調の高さを物語っていると言えないだろうか。そしてそこには現在各大学図書館に設けられている貸出規則の源流を見、かつ当時の出納事務の様子をうかがうことができるようでもある。京大における最初の「閲覧規則」であると思われるので今両文を紹介して図書館史のひとつまとしてたい。

